

# Forever Love

—神の愛—

しうや      りふかふ  
Shivya    Lyucow



白い巨大な石灰岩の上にあるアテナイのアクロポリス *akropolis* に登ったとき、青碧の空と紺碧の海を背景にして聳えるパルテノン神殿やエレクトイオンの前に立つて、存在 *Presence* を感じた。

パルテノンの大理石の円柱は白くもバラ色にも見える。風は乾いていた。空気がどこか古代の叙情を孕み、古臭くて懐かしく、エキゾチックな明快さで、遙か彼方、神儼で、エーゲ海の持つ官能的な甘やかさを微かに帯びていた。

パルメニデスのオントロジー（存在論（学））か。「存在は無空ではない。無から存在が生まれるはずがない。生じるとは無から有になることだ。よって存在は生じない。その逆（滅）もない。不生不滅である」

いや、そうではない。

どういうふうにそうではないか、説明できない。したくない。説明しようすると、そぐわないからだ。

彼女の言葉が思い出された。「わたしは耐えられない」

僕がこう言ったときだ。

「子ども心は傷附くだろう。彼らには親が変わるということとは想像を絶する。未だ幼い赤ちゃんも、大人になって血の繋がっていない父たと知ったら、本当の父親を心に憧憬するだろう。

彼らが大人になるまで、僕は待ちたい。僕なら耐えられる。君が生きて、君が世界のどこかにいてくれれば、僕は幸せだ」

愛は無償だと言う。

その究極はすべてへの愛だ。神の愛だ。敵をも残虐をも苦痛をも愛するような無際限なる愛だ。しかし人はそのようには生きられない。

人は存在を信じる。つまり諸考概を信じる。自分や彼女や愛や怨みや不幸や幸せや歓喜や理不尽があることを疑わない。無だとは思わない。思い得ない。思うと言えば笑われるだろう。悲憤慷慨せずにいられないし、苦痛を感じないこともできない。実際、それらが心をときめかせ、魂を裂く。実存だ。

考概なくして思惟は為せない。こともできない。停止する判断ができない。をもできない。判断できないという「判断」も為せない。は？ 奚や、これ！

ここまで言えば、パルメニデスなど論外、論理思考を構築する煉瓦の一つ一つである考概を無条件に是認しているところなど不様、笑止と言つても已むを得ない。いや。

いずれ、一切措定でしかない。いやいや、そうではあるまい。その断言が成り立たないというより、それ以前に成り立たないということが立たず、いやさ、非と断ずるもあらず、をもらずも、いやはや、何かを言わんとて口開いたまゝ止まる。

すべての措定が正しいものだとして、考概を収斂すれば、畢竟、存在は愛である。肯定とは只管存在 *Presence* ということであるからである。さて、名を上げられるもののうち、存在と言えないものがあるであろうか。すなわち一切は（主語・主体の有無と奈何は別に）肯定され、愛されているということであり、愛と肯定自体とも言える。神にしかせせない。人には人の道が与えられている。

じゃ、それがなかったら？

思惟が働かないもできない。如何な意識状態もあたわず。想像絶すすらかなわず。呆然自失すらならず。眞の眞なる未遂不収。